令和6年度第1回船橋市総合教育会議議事録

日 時 令和6年11月7日(木) 15時30分～16時45分

場 所 船橋市役所9階 第1会議室

出席委員

市 長		松戸 徹
教育委員会	教育長	松本 淳
	教育長職務代理者	小島 千鶴
	委員	朝倉 暁生
	委員	蓮池 政貴
	委員	大塚 佳子

議 題

不登校対策の現状や課題について

○司会（総務法制課長）

ただいまより、令和6年度第1回船橋市総合教育会議を開催いたします。本日の会議の進行をさせていただきます総務法制課の岡部と申します。よろしくお願いいたします。

まず、傍聴については、今時点で希望者はありませんが、傍聴希望者がございましたら、総合教育会議は地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4第6項の規定により原則公開となっておりますので、これに基づき、傍聴希望者の入室を随時許可するものとしてよろしいでしょうか。お伺いいたします。

（「異議なし」の声あり）

○司会（総務法制課長）

傍聴希望者が会議開始後いらっしゃった場合には、その都度、入室をしていただきます。

また、報道関係者の方がいらしております。写真撮影等につきましては、会議次第の2、議題の前までとさせていただきますのでご了承願います。

次に、本日の会議の資料ですが、A4横のホチキス留めをしております「令和6年度総合教育会議 不登校対策の現状や課題について」と、A4横の両面1枚のものになりますけれども、「不登校児童・生徒に関係すると思われる健康福祉局内事業」の2点をお手元に用意させていただいております。不足はございませんでしょうか。

それでは、次第に従いまして、本日の議題に入ります。本日の議題は「不登校対策の現状や課題について」となります。

ここからは、市長に進行をお願いいたします。

○松戸市長

皆さん、こんにちは。本日は大変お忙しい中、令和6年度第1回の総合教育会議にご出席をいただきましてありがとうございます。

そして、日頃から各教育委員の皆様には、船橋市の教育行政推進のために様々な角度からお力添えをいただいておりますこと、まず初めにこの場をお借りして御礼申し上げます。

この総合教育会議ですけれども、平成27年から、法律改正によって教育大綱を策定するところからスタートいたしました。その後、主権者教育ですとかスクールソーシャルワーカー、あとは生活困窮世帯の学習支援、そして、去年は子供たちの体験機会についてといったものを、その都度、その時期に合わせて様々な課題を取り上げてご議論をいただけてまいりました。

今年度につきましては、「不登校対策の現状と課題について」をテーマとさせていただきます。

きました。これは、ご承知のように全国的に不登校の子供たちの数が急増していて、船橋市も同様に、令和2年、コロナのときからものすごく数が増えてきております。

今年度から、教育委員会のほうで不登校の子供たちのために各学校の対策をとっているやっけてきておりますけれども、そういった中で、また今度、こども家庭庁のほうでも子供たちを支えるといった視点でのものが打ち出されてきております。

市として、福祉と学校、教育委員会、いろいろなものがやはり重層的に取り組んでいく必要があると私は考えております。今日はいろいろな方に現場の状況を報告していただき、それを伺った上で、今後子供たちのためにどういった形で市が取り組んでいくことが良いのか、その糸口を見つけて、それをまたより現実のものとして対応していきたいと考えておりますので、よろしくお願いを申し上げます。

それでは、協議に入る前に、まず学校教育部から説明をお願いしたいと思います。

○児童・生徒サポート室長

学校教育部指導課児童・生徒サポート室長の藤宮です。よろしくお願いいたします。

教育委員会では、これまでの生徒指導に加え、近年増加しているいじめ問題、不登校児童・生徒への支援を強化するため、本年度より指導課内に児童・生徒サポート室ができました。

それでは、不登校対策の現状や課題について、説明させていただきます。

目次のほうをご覧ください。まず、不登校児童生徒数の推移などの現状について説明した後、国や県の不登校児童生徒への支援の考え方について説明いたします。そして、本市での取組を紹介させていただき、その中で見えてきた課題も踏まえ、現時点で考えている今後の方向性についてお話ししたいと考えております。

まず、「不登校の現状」についてお伝えいたします。

不登校の定義から確認をします。不登校とは、「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にあり、病気や経済的理由以外の原因で年間30日以上欠席した児童生徒」を不登校と定義しております。

不登校の状況をご覧ください。こちらは、先週、10月31日に文科省から公表された「問題行動・不登校調査」の結果です。令和5年度までの全国の不登校児童生徒数の推移になります。令和5年度は小学校約13万人、中学校約21万人、合計で約35万人の児童生徒が不登校になっております。特に、コロナ禍以降急激に伸びており、中学生はこの

3年間で8万人増加、小学生はこの3年間で6万3,000人から13万人ということで2倍に伸びております。近年、不登校が低年齢から始まっていることが分かります。

文科省の担当者は、コロナ禍で崩れた生活リズムの立て直しが難しいことや、無理してまで学校に行かせなくてもよい、そういう意識の広がりがあるのではないかという見方をしております。

続きまして、本市の不登校児童生徒数の推移になります。国とほぼ同様の傾向で推移しております。令和5年度の船橋市の不登校の児童生徒数の合計については、1,480人でした。およそ小学校では54人に1人、中学生は18人に1人の割合になります。

学年別不登校児童生徒の推移になります。小学校1年生の段階から不登校になる児童が出始め、小学校6年生にかけて増加しております。また、中学校に入学するとさらに大きく増えております。中学校2年生から3年生は増加しないというところも特徴になります。恐らく、進路を意識して、学校への登校や関係機関に関わるなどがあるかもしれません。

続いて、不登校児童生徒の欠席日数の割合についてお伝えします。不登校児童生徒のうち、年間100日以上休むという児童生徒の割合は54.7%となります。不登校になると、約半数の児童生徒は年間半分以上休んでいるという結果となっております。

では、不登校の要因についてお伝えいたします。原因については様々ありますが、大きく分けると「本人」「家庭」「学校」「その他」、そういった4つに分けられます。

「本人」は、生活習慣や生活リズムの乱れ、また無気力・不安といった理由、「家庭」では、家庭環境の急激な変化や親子関係をめぐる問題、「学校」では、友人関係をめぐる問題や教職員との関係、学業不振による理由などが挙げられます。一人一人の状況も原因も違い、要因が複合的に重なっていることが多いです。

続いて、令和5年度に行われた「文部科学省委託事業 不登校の要因分析に関する調査研究」の報告書になります。左から教師、児童生徒、保護者の回答となっております。回答数が少ないため、この結果が全てではないということをご理解ください。

きっかけや要因として、「いじめ被害」が、教師が把握しているよりも多くの児童生徒の不登校のきっかけになっているということが分かりました。また、上から5番目、6番目の項目を見ると、教師が思っているより、教師との関係の中で不登校となっているケースが多いことも分かりました。さらに、下から6行目と3行目のところですが、「学業の不振」、また「宿題ができていない」など、学習面での不振がきっかけ要因となっている結果も表れております。

次のスライドをご覧ください。きっかけの要因の中で一番多かったのは、「体調不良の訴え」「不安・抑うつ」「朝起きられない」などになります。約7割の児童生徒、また保護者がきっかけの要因であると述べています。体調不良、不安・抑うつとなってしまう要因も一人一人様々な背景があると思われま

す。次のスライドは、令和5年度に行われた「千葉県教育委員会 不登校児童生徒等実態調査」の内容及び調査の結果になります。こちらも回答数が少ないため、結果が全てではないということをご理解ください。

児童生徒からの回答になります。「学校を休んでいるときの気持ち」で、「そう思う」「少しそう思う」の合計を見ると、「自由な時間でうれしい」が70.2%、「ほっとする楽な気持ち」67.1%の回答が多い一方で、「勉強が心配、気になる」が70.3%、「将来が心配、気になる」が65%、「学校の友達が自分のことをどう思っているのか気になる」、そういう回答も多くなっております。

「どんな場所に行きたいか」という質問には、「何時に行ってもいい（遅刻、早退をしてもいい場所）」が最も多く60.6%、次いで「ゆっくり休めるスペース・場所がある」が57.4%となっております。その他、以下のとおりとなっております。

続きまして、保護者からの回答になります。「学校を休んでいるとき、どのような場所で過ごさせたいか」という質問、これは自宅以外ですけれども、「誰かと関われる場所」が74.3%と最も多く、次いで「勉強を教えてくれる場所」、そして「自由に過ごせる場所」という結果となっております。

続いて、「民間施設（フリースクール等）への通所」についてアンケートを行った結果、「知っていたが利用しなかった」が65%でした。その理由としては、「子供が嫌がったから」「利用料が高かった」「自宅から遠かったから」が上位に挙がりました。

では、実際に支援機関を利用した保護者への質問を見てみると、「子供に変化が見られたか」ということですが、「変化が見られた」が58.0%、具体的にはどんな変化かは、「元気が出てきた」、また「外出の回数が増えた」、「家族に変化は見られたか」という質問については「変化が見られた」が59.4%になりました。具体的には、「気持ちが楽になった」「子供の状況を受け入れることができた」という結果となりました。

多様な学び方ができるよう支援環境の整備を行うことで、利用する児童生徒、保護者により変化が生まれるかもしれません。

続いて、「国や県の基本的な考え方」についてお伝えいたします。

こちらは、国が出している主な法律や方針になります。教育の機会確保、基本方針、支

援の在り方、「COCOLOプラン」といったものになります。それぞれについて、かいつまんでご覧いただきます。ご説明させていただきます。

「教育機会確保法」では、不登校は問題行動ではなく、社会的自立の尊重が大切であると言われるようになり、学校内外の学びの場を整備して一人一人に合った支援をしていくことが示されました。

続いて、「支援の在り方（通知）」では、基本的な考え方として、学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、社会的に自立することを目指すということが目標として示されました。文科省では、社会的自立とは「社会の中で自立し、他者と連携・協働しながら、生涯にわたって生き抜く力」と説明をしております。

そして、令和5年に「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」、通称「COCOLOプラン」が出されました。「COCOLOプラン」の中には、目指す3つの姿が書かれています。その中には、学びの場の確保、環境整備、また「チーム学校」で支援していくことも書かれています。さらに、文科省は、こども家庭庁と連携しつつ教育委員会と福祉部局等の連携・協働を強化することも書かれています。

こちらは、「COCOLOプラン」に掲載されている不登校児童生徒の支援のためのつながりのイメージになります。行政だけでなく、学校、地域社会、各家庭、NPO、フリースクール関係者が相互に理解や連携をしながら、子供たちのためにそれぞれの持ち場で取組を進めることが必要とされております。

県教育委員会でも、不登校児童生徒への支援が様々な形で行われています。主に、「千葉県子どもと親のサポートセンター」は相談事業やサポートセミナー、進路相談、元不登校児童生徒だった方の話や不登校の児童生徒を育てた保護者の方の話を聞ける機会をつくるなど、保護者を支える事業を行っております。

それでは、「本市の取組」を紹介いたします。

先ほど「COCOLOプラン」にも示されていたように、本市でも学校、行政、NPO・民間団体による連携を行っております。

こちらは「広報ふなばし」でも取り上げられた記事になっております。今年度より、校内教育支援センターを小・中・特別支援学校全校に設置いたしました。校内教育支援センターは不登校の児童生徒だけでなく、教室に入りづらい児童生徒も利用できるようになっております。

校外にある教育支援センターとしてサポートルームがあります。「ひまわり」に加え、今年度より古和釜中学校内に「すずらん」を開設しました。

また、右側のほうにはNPOの民間団体として、自分のペースで学習・活動ができる「夢のふなっこ」の活動が書かれております。

続いて、令和6年度、今年度から行われている市独自の取組を紹介いたします。

まずはスクールアシスタントです。全市立小学校と特別支援学校の校内教育支援センターに、児童生徒の見守りや交流を目的として配置されました。最大週4日、1日4時間働いております。

続いて、ピアサポーターになります。市内の中学校のうち不登校の児童生徒が多い16の中学校については、これまでに加配教員として教員が1名追加配置されていました。今回は、それ以外の加配教員のいない10校の中学校に、生徒の見守りを行うだけでなく学習支援も行えるように大学生を採用いたしました。最大週2日、1日6時間働いております。

続いて、心の専門家、スクールカウンセラーになります。心や体の悩み、いじめや不登校など、児童生徒や保護者、時には教員の悩みも聞いております。予約は学校を通じて行っております。

続いて、福祉の専門家、スクールソーシャルワーカーになります。令和5年度から市内の全中学校区内の拠点校に配置され、学校からの要請を受けて活躍しております。不登校などの問題解決のために福祉の専門的な知識や経験を活用し、学校での聞き取りや家庭訪問などから情報を収集します。スクールとついておりますが、学校というよりは、主に家庭の相談を受けながら子供の生活環境の改善を図っているといった形になります。

本日は、スクールアシスタント、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーさんに来ていただいております。スクールアシスタント、法典小学校勤務の中村美有さん、そしてスクールカウンセラー、中野木小学校、大穴中学校と、資料に記載が漏れていました宮本中学校の3校で勤務の宮本中学校勤務の石田絢子さん、またスクールソーシャルワーカー、峰台小学校・七林中学校勤務の大野薫さんがいらしております。現場の声としてお話をしていただきたいと思っております。

では、スクールアシスタント、中村さんからお願いいたします。

○スクールアシスタント

法典小学校スクールアシスタント、中村と申します。本日はよろしくお願ひいたします。

スクールアシスタントの仕事内容は、校内教育支援センターに登校する児童の見守りや交流が主な業務となります。法典小学校の校内教育支援センターは、現在9名の児童が利

用しております。登校してから下校まで1日を過ごす児童や、出られる授業や行事に参加して戻ってくる児童、1時間や2時間だけの一時利用など、児童により様々な使い方をしています。不登校で学校に登校できなかった児童が、校内教育支援センターが配置されたことで登校できるようになった事例もあります。

朝は一人一人に声をかけ、担任の先生と共有している情報を基に今日は何をやるかを一緒に考え、決めることから始まります。それぞれの児童が自分のペースで決めたことを行い、過ごしています。中には、担任の先生から渡される課題に取り組んだり、オンライン授業に参加する児童もいます。毎日、児童の様子を校内教育支援センター活動記録ファイルを活用して担任の先生、管理職との連携を図っています。また、毎月、利用状況を月例報告書として利用者数・日数を指導課に報告しています。

児童の様子としては、校内教育支援センターで学年に関わらず交流ができていて、毎日楽しく過ごしている印象です。保護者からは、「子供の居場所ができたことにより、楽しそうに学校に行く姿がまた見られてとてもうれしい」というようなお言葉をいただいています。

そのような児童が1人でも増えることを願い、これからも日々児童に寄り添っていきたいと思います。

以上となります。

○スクールカウンセラー

スクールカウンセラーの石田絢子です。私は船橋市のスクールカウンセラーとして中野木小学校、千葉県スクールカウンセラーとして市内中学校2校に勤務させていただいております。

スクールカウンセラーとして、不登校との関わりがどのようなものかを今日ご紹介したいと思います。

まず、児童生徒に関しては、学校への第一歩として相談室を利用してもらおう。相談室が安心・安全の場であるということから、まず来てもらうということをしています。継続して相談室に来られるようになってくると、そこから担任の先生につないだり、あるいは校内教育支援センターにつないだりということもしております。

継続して来られても、なかなかそこにつながらない生徒もいるのですけれども、カウンセリングを継続することで、その子の不安を解消したり、抱える課題について一緒に話すことで成長を促すことができています。

保護者に対しては、やはり子供が学校に行けなくなったということで、かなり不安を持ったり、混乱しています。そういう場合には、混乱をまず受け止めて解消させていくということと、具体的な対応、どういうふうに子供に接したらいいかという対応へのアドバイスをしております。

子供がなかなか相談に来られなかったり、学校に来られなかったりするケースでも、保護者に定期的に来てもらうことで、ご家庭での様子を聞いて変化をフィードバックして、次のステップはどうしようかということと一緒に話し合ったりしております。

一つ、好転事例をご紹介しますと思います。中学1年生男子のケースなのですが、その子は小学3年生から不登校で、小学校時代もスクールカウンセラーのところに週1回、そこだけ登校していたという生徒です。中学校に上がるに当たって、なかなか教室に行くのは難しいだろうということで、入学前に一度、相談室のほうに来てもらいました。

そして、入学後、やはり教室に行くのは難しいということで、相談室登校からスタートしました。かなり不安や緊張が高い子だったので、週1回相談室に来ることが大分安心できるようになってきたので、相談室に担任の先生に来てもらったり、あるいは校内支援教室の先生に来てもらったりして、そこで少し交流を深めたり、あと給食を一緒に食べたりしていました。

その子も大分学校に慣れてきて、夏休み明けから「校内教育支援センターのほうに行ってみようかな」という発言も出たので、一緒に見学に行き、「結構行けるかも」みたいな感じで行くようになりました。最初は、やはりちょっとずつだったので、今、11月の現時点では、朝から帰りまで毎日来られるようになっています。

これは、相談室がまず一つ、子供たちにとって安心・安全の場であるということと、あと先生や学校、子供をつなぐという役目があるのかなと思って、今日ご紹介しました。

以上です。

○スクールソーシャルワーカー

スクールソーシャルワーカーの大野です。よろしくお願いいたします。

今回の議題であります不登校に関わるスクールソーシャルワーカーの役割としましては、子供を取り巻く一番重要な環境であります「家庭の環境」を整えていくことにあります。家庭が困窮していたり、家族の中で病気を抱えている者があったり、子供の問題で夫婦間が対立していたり、または孤立しているという家族もいます。いろいろな問題でパワーダウンして、不登校になってしまっている子供がこのような家庭の状況の中では、安心して

力を蓄えていくことができません。スクールソーシャルワーカーの大きな役割の一つは、保護者に寄り添いまして、どうしたらいいかを一緒に考えながら家庭環境を整えていくことにあります。

そのための活動としまして、家庭訪問あるいは面談を行ったり、時には通院同行をしたり、または有効な福祉サービスや関係機関につなぐなどの活動をしております。

保護者が少し安定して、子供を受け止める余裕が出てくると、自然と子供は自分の将来や先のことを考えやすくなっていくということを普段の活動から実感しております。

なお、スクールソーシャルワーカーの強みとしては、学校に所属していながら教員とは違う、第三者的な立場だということ、または行政とか病院でもないというような立場であるところです。学校と家庭の環境が良好でないような場合でも、スクールソーシャルワーカーが学校の意向を誤解のないように保護者にうまく伝えたり、または家庭が抱えている深刻な状況を学校の先生方に理解してもらうことで、関係性が改善していくというようなケースもございます。

昨年度よりスクールソーシャルワーカーは学校配置となったのですが、そのことによって、様々な問題に、リアルタイムで迅速に対応できるようになったなと感じています。拠点校では一般の先生方からも質問や相談をしてくれるようになりまして、管理職以外の先生にも、私たちの役割を理解してもらえそうな状態になってきているなと思っております。

また、常に学校におりますので、子供たちの変化などをキャッチして事前に対応でき、初期対応がしやすくなっているというようなことも感じております。

拠点校以外の学校では、こまめに巡回をし、またコミュニケーションをとりながらより良い支援が行えるように努めております。

今後も、スクールソーシャルワーカーが「チーム学校」の一員としてどの学校にも定着していけるように、より良い支援の方法を模索しながら活動を進めてまいりたいと思っております。

以上になります。ありがとうございました。

○松戸市長

今、途中なのですけれども、スクールアシスタント、スクールカウンセラー、そしてスクールソーシャルワーカーの方からご報告いただきましたが、教育委員の皆さんで、このタイミングで、今発表していただいたことについて何かご質問等があればお出しただけ

ればと思います。

では、朝倉委員、お願いします。

○朝倉委員

ありがとうございます。スクールアシスタントの方に質問させていただきたいのですが、先ほど、「自分で学ぶことを決める」とおっしゃっていたかと思うのですが、「学ぶことを決める」の中身というのは学校の科目の中からでしょうか。それとも、例えば折り紙をやりたいとか、今日は本を読みたいとか、自由に選べるのでしょうか。その辺りを教えていただければと思います。よろしくをお願いします。

○スクールアシスタント

ご質問ありがとうございます。課題としましては、学校の、例えば計算ドリルであったり、国語のドリルであったり、そういう課題が学校の担任の先生からご指導があった場合はやってみたり、あとは、例えば図工とかそういう科目も校内教育支援センターでやることもあるのですが、先ほどおっしゃっていただいた折り紙とか、絵を描いたり、自由な時間も一緒に決めたりしているのが現状です。

○朝倉委員

分かりました、ありがとうございました。

○松戸市長

ほかによろしいですか。

では、大塚委員、お願いします。

○大塚委員

貴重なお話を聞かせていただいてありがとうございました。

例えば、家庭の問題があるときに、スクールカウンセラーの方が親御さんと話して、スクールソーシャルワーカーの方とお互いに連絡をとり合うときはどのようにしていらっしゃるのですか。

○スクールカウンセラー

学校を通して、やはりこのケースはスクールソーシャルワーカーさんに入ってもらったほうがいいよねというケースは、管理職に話をし、管理職のほうからスクールソーシャルワーカーさんに話をさせていただくことになっています。

勤務日がなかなか合わないのですけれども、スクールソーシャルワーカーさんの方が結構まめに、今日はスクールカウンセラーが来ている日だということで、曜日を変えて来てくださったりで連携をとらせていただくこともあります。

○大塚委員

では、間に先生とかが入って人づてにやっているということですか。

○スクールカウンセラー

そうです。最初は、やはりどうしても勤務の状況、状態ではそうなるので、管理職に入ってもらいが多いです。でも、直接お話しできる場合は、もっと直接ケースについて相談して、一緒に検討したりさせていただいております。

○大塚委員

ありがとうございます。

○松戸市長

ほかにいかがですか。よろしいですか。

さっき、スクールソーシャルワーカーの大野さんから、学校配置になってよかったというお話がありました。拠点校で今配置するようになったのですけれども、人数的にはもっと欲しいなという感じですか。

人員としては、例えばケースがどんどん増えて、不登校の子も増えているので、今増強はしているのですけれども、もうちょっとしてもらえるとちょっといろいろケアとか対応ができるとか、その辺についてはいかがですか。

○スクールソーシャルワーカー

先ほどもちょっと触れたのですが、拠点校のほうは割と手厚くなりやすいので、本当の希望を言えば、各学校にいたらもっと対応が早いかなとは思いますが、そこはまだまだ難しいのかなとは思っております。

○松戸市長

ありがとうございます。

ほかはよろしいですか。

それでは、学校教育部の説明を続けてお願いします。

○児童・生徒サポート室長

では、続けていきたいと思います。

続いて、市の総合教育センターのほうから説明をお願いします。

○教育支援室副主幹

よろしくお願いいたします。

総合教育センターでは、本市に在住する児童生徒、保護者及び教職員を対象に、教育関係全般のご相談を電話、来所にてお受けしています。相談の約6割が不登校や登校渋りの相談です。

来所相談では親子平行面談を実施しており、親担当と子担当の相談員が一人ずつ付いて話を伺います。お子さんはプレイルームで相談員と一緒に遊びながら過ごし、様子を観察しつつ、本人の気持ちを聴きながら、どのような支援ができるかを一緒に考えていきます。在籍する学級が本人の学力に合っていない場合や、発達の問題を抱えている可能性がある場合は、特別支援教育班と連携しながら相談を進め、学びの場所を変えることで学校へ通うことができるようになったケースもあります。

外に出る習慣をつくるために、隔週や月一等で通所し、教育相談班を居場所の一つとして活用している児童生徒もいます。

校内教育支援センターには行きづらいけれども、小集団での活動ができそうな児童生徒であれば、サポートルームを紹介いたします。

続いて、サポートルームについてです。サポートルームは、本市在住の不登校児童生徒を対象に、集団生活への適応、社会的自立に向けての支援を目的として運営しております。本年度は、従来の「ひまわり」に加え、「すずらん」を新たに古和釜中学校内に開設いたしました。午前、午後、1日の3コースがあります。

今年度前半は全校に校内教育支援センターが開設されたことにより、サポートルームへの通室児童生徒が昨年度と比べて減少いたしました。しかし、年度の後半に入ってから、

サポートルームを希望する児童生徒が増加傾向にあり、例年とほぼ同数の児童生徒が通室しています。

サポートルームでは、保護者支援として個別相談、保護者会、「サポートルーム通信」の発信、リフレッシュ講座等を実施しています。④のリフレッシュ講座では、不登校をテーマにした講演会や保護者交流会を年に3回実施しています。不登校という共通の悩みを持つ保護者同士の交流の機会を持つことで、少しでも勇気づけられ、リフレッシュしていただければという思いで企画・運営をしております。

今後も、不登校児童生徒や保護者に寄り添った支援ができるよう努めてまいります。

○児童・生徒サポート室長

続いて、青少年センター、お願いします。

○青少年センター所長補佐

青少年センターについてご説明いたします。

青少年センターには、本町にある本所と高根台にある北部分室があります。どちらも、不登校児童生徒の支援として、相談活動や学習支援を行っています。

青少年センターへの通所の特長は、個別対応ができるという点です。学習室には間仕切りがあり、職員が常駐しています。集団に入れない、人との関わりが苦手といった児童生徒が通所するケースが多くなっています。

担当職員と学校、家庭、本人で相談し、プログラムをつくり、個に応じた活動を行います。

学習は自学・自習を基本としています。また、小グループでの学習や活動をすることもあります。最後の30分は、プレイルームで卓球やビリヤードなどの活動をする児童生徒もいます。

今年度は、10月末現在で本所に9名、北部分室に12名、計21名の児童生徒が通所しています。

また、毎年8月下旬に、市内小中学校に通う不登校及び不登校傾向の児童生徒を対象とした2泊3日の「一宮ふれあいキャンプ」を実施しています。野外炊飯やキャンプファイヤーなど様々な体験活動や学生アシスタントとの交流を通して、コミュニケーション能力の向上や自立への動機づけを目的としています。このキャンプをきっかけに、9月以降に登校できたり、行事に参加できるようになったりと、生活に変容が見られる児童生徒もい

ます。

青少年センターからは以上です。

○児童・生徒サポート室長

続いて、指導課のほうから、また説明をさせていただきます。

船橋市では、不登校児童生徒への学習支援として、一人一台端末を利用してオンライン学習保障を行っております。学習保障の特徴については、こちらのスライドにあるとおり、小学校1年生から中学校3年生までの学習内容について、動画で授業を行うということが特徴になります。不登校で家庭にいる場合や、校内教育支援センターで動画で授業を受けて学ぶことができます。

対人関係に不安のある児童生徒への配慮として、様々なキャラクターが授業を行っております。学習の状況も、学校で確認することができます。

また、指導課から保護者に向けて、船橋市不登校支援リーフレットも作成をしております。フリースクールや不登校の保護者の会などの情報、連絡先なども載せております。

また、この10月より、不登校支援情報を船橋市の情報メールでも配信を行いました。困っている保護者に迅速に情報を提供できるように、整備を行いました。

それでは、「今後の方向性」についてお話いたします。

今後の方向性について、図に表しました。表のほうをご覧ください。多様で適切な教育の機会を確保、そして不登校児童生徒の社会的自立を目指すという方向で支援を行ってまいります。

縦に大きく3つに分けられます。左側の一列は子供の様子、真ん中の二列は関係の施設や機関、そこに関わる人、そして右側の二列は学習など支援体制が書かれております。

まず、右側をご覧ください。右側の支援体制、上部のオレンジの部分については、教員の資格を持つ人が学習支援を行っております。下の緑の部分は自立支援、居場所づくりとなっております。右側、不登校児童生徒には、一人一台のオンライン端末、オンライン学習支援で学習保障を行っております。

左側をご覧ください。オレンジ色の部分、一段目、学校へ通うことができる。登校して学級で学ぶ児童生徒になります。

続いて二段目、学校へ行けるが、教室へ入りづらい児童生徒になります。今年度から全校配置になった校内教育支援センターで、スクールアシスタントやピアサポーターが主に対応をしております。

三段目、黄色い部分、在籍校には行けないが、学校には行くことができる児童生徒になります。サポートルームに通い、小集団で生活することができます。

四段目、水色の部分、学校には行けないが、関係機関へ通所できる児童生徒になります。個別の相談機関で、市の総合教育センター教育相談班や青少年センター、また「夢のふなっこ」などがあります。

続いて、一番下の段、ピンクの部分をご覧ください。学校・関係機関どこにも行けないが、家庭なら学習ができる児童生徒になります。家庭でICTを使って学習する児童生徒、また、家庭にこもっていて気持ちを回復している児童生徒もそこには含まれます。

続いて、その上の緑の部分をご覧ください。近年増えてきているフリースクールになります。これは、学校へは行けないけれども人と関わることはできる児童生徒になります。家庭にこもっているよりも、少しでも外に出て他者と関わろうとする力を持っています。

民間のフリースクールでは学習も行っているところもありますが、多くの施設は学習がメインではなく、無理せずに自分のペースでやりたいことを見つけていく形をとっています。人との関わりができるよう居場所を提供しており、カードゲームやボードゲーム、時にはパソコンなどを使って友達と交流を行っております。

前半の説明でもあったように、不登校にある児童生徒は、何時に行ってもいい、時間に縛られない場所や、ゆっくり休めるスペース・場所を望んでおります。また、保護者の要望としては、利用料金のかからない、自宅から近くて自由に過ごせる場所を探しています。既存の施設を活用して、新たな児童生徒の居場所づくりができればよいのではないかと考えます。

続いてのスライドをご覧ください。こちらのスライドは、令和5年度の不登校児童生徒が、どのような機関を利用したかを示すものになります。

令和5年度の不登校児童生徒数は、1,480人で、緑色の民間のフリースクールには96人、また水色の個別相談として、総合教育センター、教育相談班、青少年センター、夢のふなっこには279人、そして黄色のサポートルーム「ひまわり」には106人通っております。

オレンジ色の部分の校内教育支援センターについては、今年度全校配置になりました。令和6年度の参考として、9月末現在、501人通っております。

差し引くと、残り、大体約500人になります。この中には、休みがちなが学級に登校できている児童生徒もいますが、学校以外の関係機関どこにも関わっていない児童生徒もいます。

学校の先生は、朝や昼間は登校してくる児童生徒を迎え、授業を行っております。朝や日中に家庭にいて登校を渋っている児童生徒に、学校や校内教育支援センターに行ってみないかと声をかけてくれたり、同じ境遇の友達と関わるため、家庭から関係施設へ一緒に行ってみようと思ってくれたり、誘い出してくれるような人がいれば、子供も保護者も学校もありがたいのではないかと考えます。

以下、最後のページまで、学校や関係機関での取組を載せさせていただきました。参考資料としてご確認ください。今後の方向性については、教育委員会といたしましても、そのほか、こういった取組が不登校児童生徒への支援として有効なのか、今後も国や先進自治体での取組など情報収集を行いながら、船橋市の子供たち一人一人の社会的自立をサポートしていけるよう取組を進めてまいりたいと考えております。

指導課からの説明は以上でございます。

○松戸市長

ありがとうございました。

今、教育委員会のほうで取り組んでいる内容について説明をいただきましたけれども、健康福祉局、何か付け加えることはありますか。

○健康福祉局長

健康福祉局長の川端と申します。よろしく申し上げます。1点だけ、2つ目の配付資料の趣旨だけご説明させていただければと思います。

教育委員会からの説明の資料の中では、市長部局との連携といったお話ですとか、あとはスクールソーシャルワーカーの大野さんのお話の中で、家庭環境を整えて関係機関につないでいただいているとお話がありました。ぜひ、市長部局で実施している事業をご活用いただきたいと思いますと考えております。

ただ、一方で、支援とか制度はなかなか多岐にわたっておりますし、本市では、他の自治体ではやっていない独自の事業も様々実施しております。このため、どういうものが見えるのか、どこに話せば話分かるのかという意味で、皆様方の課題解決の一助となるために一つ資料を用意しております。どういうことをして、どこに聞けば話分かるのかというふうな資料をつくらせていただいております。

これで最終版というわけではなくて、もっとこういう情報が欲しいとか、こういうのがあったら助かるなということがあれば、ぜひお声を聞かせていただいて、改善していきたい

いと思っております。この辺り、教育委員会とも連携しながらうまく進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

以上でございます。

○松戸市長

今の段階での船橋市の教育委員会の取組と、健康福祉局が用意している部分を紹介させていただきましたけれども、これを踏まえて、教育委員の皆さんから、今後に向けて何かご意見とか要望があればと思います。

では、蓮池委員からお願いします。

○蓮池委員

まず、この資料を先日から拝見してまして、船橋市の不登校に対する、またいじめに対する体制も手厚いということは私も十分理解しているつもりでございます。ただ、この制度というのは、子供が行きついた先の防波堤みたいなもので、やはりここに行きつかせない努力というのも必要ではないかと思っております。

規定の中では年間30日以上欠席を不登校とみなすがありますが、その前段階で、黄色信号をなるべく察知してあげられる体制、その時点でのフォローをしてあげる体制があればと思います。子供たちは学校を休んだことで気持ちが楽になるという表現もある一方、半分では不安がある、となっております。その期間が長くなればなるほど、子供たちは、不安と学校に行きづらい状況というのが出来上がってまいります。まず黄色信号の察知に関する部分にも、学校ごとでも結構ですし、委員会のほうで草案をまとめて学校にレクチャーする形でもいいのですが、その段階での努力にも少しお力を入れていただけたら助かると思っております。

そして、保護者に対し「子供たちがどんな場所に行くと安心ですか」という中で、「誰かと関わる場所」が74.3%となっており、保護者も人と関わることの重要性は分かっているわけです。ただ、コロナを機に、不登校が増えてきているように、その家庭ごとの環境、親の判断とか価値観が、外に出ないことによって、それが子供の世界になってしまう。

それはコロナ禍というどうしようもない状況ではあったのですが、私は、保護者の立場として学校と長く、つい最近まで関わってまいりました。保護者側の視点の意見とて言えるのですが、やはり親の学びですね。子供が入学したと同時に親も自分が入学した気持

ちになって、子供と一緒に成長しなきゃという意識を持たせることが必要だと思います。

親の価値観だけで子供を縛りつけてしまうと、子供の中でいろいろなストレスがたまったり、それがよくない方向に行ってしまうこともできれば避けたいと思うので、親が学べる場所の提供、講演会でも何でもいいです。例えば話し方一つ、イントネーション、語尾が上がるか下がるかで子供の受け取り方は全く変わってしまう。そんな話し方教室からでもいいので、やはり親が常に学べる場所というものをつくる。

低学年のときには不登校が少ないです。上に行くほどだんだん子供も知恵がついてきて、ストレスを感じるようになって休むようになってしまうので、親が学校に関わって一緒に学べる場所を少し行政のほうで提供していただけたら、こういった制度にお世話になる可能性が少しでも減らせるのかなと思っております。

この制度自体は、本当に感服するぐらいによくできていますけれども、これにお世話になる時点では子供がもう追い詰められた状態ですから、そこに至る前の児童の数を少しでも減らす努力も必要ではないかと思って、今回、意見としてお伝えさせていただきます。

以上です。

○松戸市長

ありがとうございます。

それでは、小島委員、ご意見をいただければと思います。

○小島委員

いただいているパワーポイントの10ページ目、11ページ目辺りの資料、「不登校の現状（きっかけ要因）」というのが非常に興味深いなと思って拝見しております。どこが興味深く感じるかといいますと、教師と児童生徒、保護者とで、割合がすごくずれている項目が何か所かある。

例えば、「いじめの被害」がきっかけだろうと考える教師が4.2%、児童生徒26.2%、保護者が29.2%、あるいは「教職員とのトラブル」等のところも、やはり似たような形です。こういうのを見ていると、学校側としてはたいしたことではないと考えていることが、意外ときっかけだと児童生徒、保護者は思っているのではないかと。

特に、教師への不信感、学校への不信感的な部分というのは、例えば「教職員への反抗・反発」のところでは、保護者のほうがそれを要因だと考える割合がすごく高いというのを照らしてみると、何かこの辺りに解決の糸口が一つあるのではないかと思います。

自分が育った時代というのは、親が学校に対して全幅の信頼を置いていたのか、「学校の言うとおりにやっていけば間違いない」と言われて育つ世代だったかなというのがあります。逆に、今ではそういう考え方ではなくて多様な価値観という前提でいくと、「学校が言っているからといって、それが正しいわけではない」と保護者のほうも当然考える。児童生徒もそう思っている。そういう形で保護者からの信頼というものがどうも薄くなっているところも、やはり不登校の増大には結びついているのかなと思います。

受け皿をすごくたくさん頑張って船橋市は用意してきているのだなと思います。逆に、未然の防止という意味では、この辺りの保護者とのすれ違い、また、児童生徒が一番感じているのは体調不良ですとか、そういう生活習慣的な部分をどうも認識している部分もあるようなので、それは何が原因か。スマホやタブレットの普及ですとか、生活習慣自体、共働きになって、なかなか規則的な生活というのが親の勤務との関係で送れないですとか、いろいろな要因があるのかもしれないですけれども、この辺りは、逆に保護者がある程度整えていける。ただ、保護者にそういう知識とか意識がないとなかなか手は回らない。子供から言い出すことも、恐らくこういうものは難しい部分がある。そういうところを見ていって、要因を少しずつ減らしていく。

特に、教育委員会ですとか学校側で減らせる要因というのは減らしていかないと、この問題は数が増えていく一方で、受け皿をどれだけ用意しても足りないことになるので、そういう部分で未然防止の観点というのはとても重要だと思いました。

以上です。

○松戸市長

ありがとうございます。

それでは、朝倉委員、お願いします。

○朝倉委員

本当に、この資料おまとめいただきましてありがとうございました。また、前半のご説明は、私としてもとても勉強になりました。ありがとうございます。

その上で、先ほど、この資料の中で文科省が言っている「自立」ということ、これはやはりすごく重要だと思うのです。39ページの図、この「今後の方向性」というのは一番重要だと思っているのですが、文科省の言う社会的自立というのは、つまり、全生徒に言えるような大きな話であると思うので、この39ページの右側のほうにある「居場所づ

くり・自立支援」の「自立」というのは、もうちょっと違う意味の自立だと思うのです。ここの「自立」というのを、もうちょっと段階を見える化していく必要があるのかなと感じました。

例えば、「自立」の中にもいろいろあると思いますが、「自分からアクションがとれる」とか、その次、「自分の意見を言える」とか、何か自立の段階みたいなものを少しイメージしていくと、対応がしやすいのかなと感じました。

というのも、実は大学でも、例えば知能は高いのだけれども課題が出せない学生がいます。学力が伴わないのではなくて、「今日の授業の感想を400字で書いてください」みたいなことでも、その場でやらずに、気がつかないうちに締切りが過ぎて出せなかったみたいな子がいて、それで単位を落としてしまう。その学生さんの親御さんに話を聞いてみると、実は中学生の頃から、課題が出せない、宿題が出ないというのをしばしば指摘されたというようなことがあります。

私は、よくその学生さんに「遅れるなら遅れるで、遅れてもいいから一言遅れますというメールを打てませんでしたか」と。それは、要するに自分からアクションを出すということですよね。それから、「未完成でもいいから、400字にならなくてもいいから、例えば締切り内に出すことはできませんでしたか」とか、いろいろ聞きながら対処することがあるのですけれども、「自立」というものの段階をやはり細かく示していて、この子は何ができて、この子は何ができないみたいなことが分かってくると、自立の中身というのがもうちょっとシステムティックになっていくのかなと感じました。これが1点です。

もう一つは、今は学生アシスタントさんとかスクールアシスタントさん、それからピアサポーターの方々、いろいろな方々が関わられていて、大学の学生が何人かお世話になっているかと思うのですけれども、そういった方々や、学校の先生方も含めて、我々大学教員も実はそうなのですけれども、教科に関する教育だけでなく、担任をするスキル、要するに教育の部分です。チームをつくるとか、モチベーションを上げるとか、そういうことに対するスキルアップはなかなか機会がないと思っています。

実は、フリートークの中でいつか機会があったら、教育委員会会議の中でご提案しようかなと思っているのですが、チームビルディングとか、コーチングとかのスキルを、担任の先生だけではなくて、学生アシスタントさんとかピアサポーターの方、スクールアシスタントの方々と一緒に考えていくような機会が持てればいいなと思いました。

以上、2点申し上げます。ありがとうございました。

○松戸市長

ありがとうございます。

では、大塚委員、お願いします。

○大塚委員

私は大人を診ている精神科で働いているのですが、経験の話をしますと、やはり家庭内の夫婦関係とかに問題があって、しばらくするとお子さんが不登校になるということが多いです。なので、親御さんのメンタルの影響はやはりあると日々感じています。

ただ、親のいろいろな問題が解決しないと子供はよくなるか、ということそうではなくて、私はお母さんを通じて不登校のシステムというのを知ることが多いのですが、スクールアシスタントさんとか、いろいろいると思いました。お母さんが多いですが、担任の先生に言われたことがすごくよかったとか、スクールカウンセラーさんに支えてもらうとか、そういうことで親御さんのストレスが軽くなると、必ずそれはお子さんに反映するものなのだなと思っています。

親御さんは親御さんで大変で、お子さんのほうになかなか取り組めないこともあります。それ以外の大人の方が、ただ話を聞くというよりは、そのお子さんの身になって考えてくれる大人がいるというのが、すごくお子さんの救いにもなるし、それが親にもとてもいい方向に行くという経験があるので、今回、こんないろいろなネットワークを生めているということがあってよかったと思いました。

ただ、16ページですか、支援機関を利用しても半分ぐらいの効果しかないというところは分析しないといけないかなと思います。

あとは、健康福祉局のほうでも相談場所がいっぱいあるのですが、いっぱいあり過ぎて、ワンストップ体制のように、そこに電話したらコーディネートしてくれる人がいるとか、あとは一つの支援機関でうまく行かなかったときに次のアドバイスをしてくれるとか、全体を見てくれて終始寄り添ってくれる人がいたほうが良いと思いました。

以上です。

○松戸市長

ありがとうございます。

では、最後に教育長、お願いします。

○松本教育長

不登校の問題というのは、やはり喫緊の課題というか大きな課題ですので、本当に子供たちが社会的に自立していくということについて、しっかり考えていかなければいけないと思っています。

小学校のスクールカウンセラーが全校配置されているということは船橋市の非常にいいところで、スクールカウンセラーの方には大変お世話になっています。

それから、スクールソーシャルワーカーの方が、家庭訪問をしていただいているケースが結構あると思います。実は、不登校になると、学校の教員の家庭訪問をとっても嫌がる家庭が結構多いです。

先生が来るのは駄目だけれども、スクールソーシャルワーカーの方であれば受け入れられるというケースがあって、家庭内の調整とかへ大きく関わっていただいていると思っています。

私は、教育委員会にいたときに、適応指導教室の最初の担当で、それから青少年センターに8年いて、不登校の関係の子供たちと付き合いがあって、一緒にキャンプなどにも行きましたが、本当に子供たちが喜ぶのは、話を聞いてくれる人がいるということですよね。

もう一つは、やはり、学習が分かるということは非常に重要なことだと思います。登校できない子と一緒に学校に行って教室に入ったときに、「松本先生、今日授業で分かったよ」とすごくうれしそうな声で言うんですよ。データを見ると、それぞれ勉強について、学校も、保護者も、本人も同じような感じで思っているのですが、やはり勉強が分かるということは非常に重要なのだろうなと思っているところがあります。

それと、校内教育支援センターを設置して、人もつけていただいているのですが、あるフリースクールの方とお話したときに、「どんどん増えてきていたのだけれども、校内教育支援センターができたら学校へ帰ったんです。生徒が減ってしまいました」というお話があり、これはもうびっくりで、すごいですよねという話になりました。

今年度から全校に設置しているのですが、1年間やってみて、どういう活動をしたかとか、どういう活用の仕方をしたかというようなことも含めて、様々な状況を確認して来年度につなげていただければと思っています。

先ほど、大塚委員のお話にありましたが、健康福祉局の方にぜひお願いしたいのは、話を聞いてくれる場ですね。やはり、学校にも教育委員会にも相談したくないという親御さんがいます。スクールカウンセラーの方とかスクールソーシャルワーカーの方に相談をするだろうと思いますが、「相談したら、それが学校に知られてしまうのではないか」みた

いな話になってくることも多いので、健康福祉局の皆さんには、ぜひ保護者の相談をお願いできればと考えています。

以上です。

○松戸市長

ありがとうございました。

まだ言い足りないというか、何かありませんか。

(なし)

時間も迫ってきましたので、今日は本当にありがとうございました。今日はスクールアシスタントの方とスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの方も同席をしていただいて、それぞれの現状を話していただけたことと、やはりこうした場で一緒になって情報共有ができたというのは非常に大きな意味があると思っています。

各教育委員の方々、また、今の教育長からのお話もそうですけれども、子供の立場と先生の立場、そして親も、お父さん、お母さんとか、ひとり親の方もいらっしゃいますけれども、家庭の立場、それぞれやはりいろいろな感覚、いろいろな状況がある中で、今回、健康福祉局が市で対応していることをまとめましたけれども、冒頭にちょっと触れましたように、これから学校現場、教育委員会だけではなくて、健康福祉局のいろいろな所管のところと重層的にやっていく必要があるので、教育委員会のほうはまたブラッシュアップしていただく。

市のほうは市のほうで、学校も、先ほどの誰に相談していいか分からないとか、どこに行ったらいいか分からないというのは、実は、職員同士も意外にコミュニケーションが取れておらず時間がかかってしまう。重層的支援をやっていくためには、日頃から、健康福祉局の担当は、取りあえずここでやりますというのを明確にして、教育委員会のほうにもお知らせをし、教育委員会のほうも、指導課だけではなくて指導課の誰々というところまで明確にしていくと、この辺の問題の整理の仕方がもっとクリアになっていくのかなと思います。

先ほど、保護者の人たちの学ぶ場とかいろいろなことがありましたけれども、そういうのも、やはりいろいろな角度からこれからやっていく必要がある。じゃあ、これはどうしようかといったときに、うちの健康福祉局のほうで、こんなことができるかもしれないというようなこともあると思います。

あとは、今日、私は皆さんのお話を伺っていて、やはり家庭が落ち着かないと子供たち

は本当に大きな影響を受けてしまう。この辺はスクールソーシャルワーカーの方だけではなくて、健康福祉局もいろいろな制度でやっていますけれども、子供は大丈夫かなという視点を持ちながら、みんなが取り組んでいければいいかなと思います。

今年の4月から本当に教育委員会が頑張ってくれて、体制をつくってもらいましたので、今年1年やった結果を踏まえながら、またさらにいい形で、今後、健康福祉局の連携も含めてやっていければなと思います。改めて、また何かの機会にこういった場所をつくっていきたいなと思いますので、よろしくお願いします。

時間もちょうど迫ってきましたので、本日の総合教育会議、これで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

○司会（総務法制課長）

今回の開催につきましては、開催することが決定しましたら日程等を調整させていただきます。なお、重大事案があった場合には、緊急にお集まりいただくこともございますので、その際はどうぞよろしくお願いいたします。

以上をもちまして、令和6年度第1回船橋市総合教育会議を閉会といたします。本日はどうもありがとうございました。